

『関西大学一一五年のあゆみ』の編纂経緯

熊 博 毅

明治十九年（一八八六）十一月四日、大阪西区京町堀の願宗寺を仮校舎として誕生した関西大学は（関西法律学校がその前身）、二十一世紀最初の年である平成十三年（二〇〇一年）に創立一一五年を迎え、これを記念して『関西大学一一五年のあゆみ』を刊行した。

既刊の年史と年史編纂組織

関西大学では、『一一五年のあゆみ』が発行されるまでに『関西大学創立五十年史』（昭和十一年五月刊行）、『関西大学七十年史』（昭和三十一年三月刊行）、『関西大学百年史』（昭和六十一年十一月から平成八年三月まで逐次刊行）の三つの年史が上梓されている。

『創立五十年史』と『七十年史』は、ともに一冊にまとめられた大学史であるが、『百年史』は「通史編 上」「通史編 下」「人物編」「年表・索引編」「資料編」「図説 一〇〇年のあゆみ」の五編六冊からなる大著である。それだけに編集にも時間を要し、昭和五十七年に具体的な作業が始まってから、平成八年三月に最後の「資料編」が刊行されるまで、実に十四年近い月日が流れている。

ところで、本学の年史編纂にあたっては、従来からその時々には暫定的な年史編纂委員会が設置されてきた（七十年史編纂委員会、百年史編纂委員会など）。ところが、今回の『一一五年のあゆみ』は、大学史編纂の施策を一新して、恒常的な委員会としての位置づけにある関西大

学年史編纂委員会がその編集を担当した。この点が従来の年史編纂と大きく異なったところである。

「一・一五年のあゆみ」の編纂にあずかった年史編纂委員会委員は次のとおりである。

委員長

森本靖一郎

(平成十二年三月十日～平成十三年十一月四日)

副委員長

市川訓敏

(平成十二年三月十日～平成十三年三月三十一日)

矢野章成

(平成十三年四月一日～平成十三年十一月四日)

法学部選出委員

市川訓敏

(平成十二年三月十日～平成十三年三月三十一日)

奥村郁三

(平成十三年四月一日～平成十三年十一月四日)

文学部選出委員

小山仁示

(平成十二年三月十日～平成十三年三月三十一日)

吉田永宏

(平成十三年四月一日～平成十三年十一月四日)

経済学部選出委員

角山幸洋

(平成十二年三月十日～平成十三年三月三十一日)

原田聖二

(平成十三年四月一日～平成十三年十一月四日)

商学部選出委員

松谷勉

(平成十二年三月十日～平成十三年十一月四日)

社会学部選出委員

大石準一

(平成十二年三月十日～平成十三年十一月四日)

総合情報学部選出委員

井上宏

(平成十二年三月十日～平成十三年十一月四日)

工学部選出委員

矢野章成

(平成十二年三月十日～平成十三年十一月四日)

外国語教育研究機構選出委員

安川昱

(平成十二年四月一日～平成十三年十一月四日)

年史編纂経験者

横田健一

菌田香融

神堀忍

森本靖一郎

熊博毅

(いずれも平成十二年三月十日～平成十三年十一月四日)

日)

学識経験者

山野 博史

荒木 紀忠

高橋 隆博

出版部出版課長

矢崎 賢司

石田 健一

(平成十二年三月十日～平成十二年三月三十一日)

藤本 道人

荒木 紀忠

(いずれも平成十二年三月十日～平成十三年十一月四日)

十三年三月三十一日)

(事業局次長として兼務、平成十二年四月一日～平成

教学部長

伊藤 誠宏

年史編纂室課長

荒木 紀忠

(平成十二年三月十日～平成十二年九月三十日)

(事業局次長として兼務、平成十三年四月一日～平成

岩見 和彦

十三年十一月四日)

(平成十二年十月一日～平成十三年三月三十一日)

また、この『一一五年のあゆみ』の編纂にあたっては、

副学長

岩見 和彦

年史編纂委員会の実務的役割を担う形で、書籍の編集経

(平成十三年四月一日～平成十三年十一月四日)

験が豊富な人たちが構成された編集作業部会が設けられ

事業局長

大津 健造

た。年史編纂委員と学内関係者の中から選ばれた編集作

(平成十二年四月一日～平成十三年三月三十一日)

業部会のメンバーは次のとおりである。

松原 克彦

山野博史、市川訓敏、荒木紀忠、熊博毅、石田健一、

(平成十三年四月一日～平成十三年十一月四日)

藤本道人、森田敏朗、成岡昭二、福井智佳子

事業局次長

大 崋 征 次

編集作業部会は、年史編纂委員会が開催される一週間

(平成十二年三月十日～平成十二年三月三十一日)

ほど前に事務局が作成したレイアウト案を校閲し、掲載

内容に遺漏がないかどうかの検討やチェックなどを行った。

編集方針と構成

『一一五年のあゆみ』は『百年史』以来、十五年ぶりに刊行された大学史であるが、その発行が決定されたのは、平成十二年三月十日のことである。この時の委員会では、学園ならびに社会がめまぐるしく変化していく現代にあつて、キャンパスの状況をこまめに記録し、発表していくことは大きな意義があるということで、今後は五年ごとに年史的な写真集『あゆみ』を制作していくこともあわせて決定された。なお、写真集のほかにCD-ROM版の『あゆみ』を制作する案も出されたが、これについては経費などの点から、その制作は見送られた。

『一一五年のあゆみ』を発行することが決まってから半年ほどの間は、内容や構成についての検討が行われ、その結果、次のような編集方針が決定した。

一、すでに『関西大学百年のあゆみ』が刊行されていることから、創立百周年までの部分は圧縮し、それ

以後、現在にいたるまでの学園の新しい動きの紹介に重点をおいた構成とする。

二、掲載写真を厳選し、視覚に訴えるレイアウトを行い、映像感覚にすぐれた若い世代の関心に応えられるものとする。

三、大学の刊行物として、学問的な史的評価にも耐えられる内容のものとする。

いくつか補足説明をしておこう。編集方針の一に関連しては、創立百周年までの部分を圧縮するという視点から時代区分の見直しが行われた。『百年のあゆみ』は「関西法律学校の誕生」(明治十九年～三十五年)、「定礎の時代」(明治三十六年～大正十一年)、「昇格の実現」(大正十一年～昭和六年)、「風雪にたえて」(昭和七年～二十年)、「不死鳥のように」(昭和二十年～三十年)、「総合大学への躍進」(昭和三十年～四十四年)、「教学の充実」(昭和四十四年～六十一年)という七つの時代区分で構成されていたが、『一一五年のあゆみ』に関しては、明治十九年の創立から大正十一年の大学(旧制)昇格までを「揺籃期」、大学昇格から昭和二十年の終戦までを「発展期」、

終戦から昭和六十一年の創立百周年までを「飛躍期」、創立百周年以降、平成十三年の創立一一五年までを「関西大学第二世紀」の四つの時代に分けて構成することにした。

編集方針二の視覚に訴えるレイアウトを、ということに関連しては、印刷仕様が変更されることになった。『一一五年のあゆみ』は当初、モノクロページ（前半部分）とカラーページ（主に百周年以降）の混在した本になる予定であったが、映像的な観点から仕様を再検討した結果、オールカラーで印刷することになったのである。これにより、白黒の写真であってもセピア調に仕上げることができるようになったし、全編を通じて共通した色彩のロゴや、時代区分を色分けしたインデックスをつけることができるようになり、本そのものが見やすく、使いやすくなった。

さらに、内容構成の面で『一一五年のあゆみ』が『百年のあゆみ』と大きく変わったのは、歴史的な経緯を「略史」として巻末にまとめ、本編に掲載された写真には簡潔なキャプションのみをつける体裁を採った点である。

『百年のあゆみ』は「図説」とうたってあるように、写真キャプションならびに時代背景等の解説文を同じページに収録していたが、『一一五年のあゆみ』では「略史」を巻末にまとめ、本編に掲載された写真には必要にして十分なキャプションをつけるにとどめたのである。しかし、このことによつて逆に写真そのものの持つ歴史性が鮮明に浮かび上がることになった。

また、委員会では英文の説明文を設けることも提案され、当初は和文と英文の両方を併記した紙面にする予定であったが、レイアウトならびにスペースの関係から、本編の写真については和文のキャプションのみとし、そのかわり、掲載写真一覧表に英文の説明をつけ、そこから本編の写真をたどつてもらう方法を採用ことにしたのである。

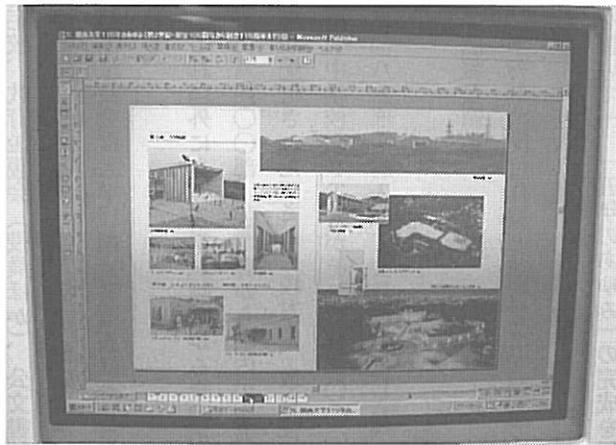
編集作業の実際

『一一五年のあゆみ』の編集にあたっては第一次と第二次、二とりの素案が作られた。第一次素案は主に掲載すべき項目やページ割りの確認等に利用した。主だつ

た写真をスキヤナ等で読み込んで収録したが、あくまでも「素描」というべき内容のものであった。平成十三年二月から三月にかけて作成された第一次素案は、平成十三年三月二十五日の年史編纂委員会にかけられ、そこで出された意見に基づき、具体的なレイアウトを伴う第二次素案の編集に取りかかった。

写真のレイアウトについては当初、印刷所のデザイナーに依頼する予定にしていたが、具体的な編集のために残された時間が半年あまりしかなく、写真を選定し、その写真の内容や意義を説明したうえでデザインしてもらうには絶対的に時間が足りないことから、年史編纂室でレイアウトをすることになった。幸いマイクロソフト社から「Publisher 2000」という編集用アプリケーションソフトの出ていることが分かり、それを使用することにした。このソフトは、スキヤナ等で読み込んだ画像と、キーボードで入力したデータをパソコンの画面上で容易にレイアウト編集できるもので、これにより、ほとんど印刷の下原稿に近いものを作ることができた。

平成十三年四月十七日の委員会では「揺籃期」と「発



パソコン画面上での編集状況

展期」、五月十六日の委員会では「飛躍期」、六月二十二日の委員会では「関西大学第二世紀」の前半部分、七月十九日の委員会では「第二世紀」の後半部分と「略史」ならびに「略年譜」「掲載写真一覧表」が主に検討された。そして夏休みが明けた九月四日の委員会で全体を通しての最終チェックが行われた。いずれの委員会でもパソコンとプロジェクトをつなぎ、「Publisher 2000」で編集したレイアウト案をスクリーンに映

して説明を行った。各委員に配付した資料が白黒のコピーであるため、色彩の調子を見てもらうためにプロジェクターを利用したのである。また、手元の配付資料も実際の本をイメージしてもらうよう両面コピーで冊子状にした。

レイアウト原稿は、年史編纂委員会承認を受けた部分から順次、印刷所に提出され、数度にわたる文字校正、色校正を経て、最終的に手が離れたのは平成十三年九月二十日ころであった。本来の刊行予定日は創立記念日である平成十三年十一月四日であるが、校友総会がそれ以前に十月十四日に開催され、記念品としてこの『一五年のあゆみ』が配付されることになっていたため、それに間に合わせる必要があった。印刷・製本には最低二十日程度の日程を必要とするため、九月二十日ころが責の最終期限であった。そのため、編集・校正作業は最後、時間との闘いであった。

納品・配付作業

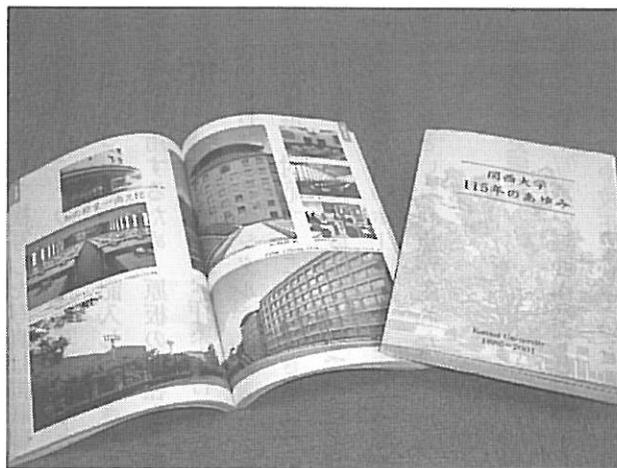
完成したA4判、一六〇ページ、オールカラーの『一

五年のあゆみ』は数度にわけて納品された（印刷部数は三万部）。最初の納品は平成十三年十月十日で、翌十一日の理事会で披露された。その後、所定の手続きを経てから学内外に配付した。主な配付先は、学内配付（理事会・評議員会関係者、教職員）、学校関係者、国際交流協定校、教育後援会（役員ほか）、公文書館・公共図書館・博物館、報道機関、他大学（図書館ほか）、全国大学史料協議会会員大学、創立者遺族ほか、資料提供者などである。

これ以外にも、入学試験課から全国の高校や予備校などに六四〇〇部、就職課から国内の主要企業に五八一〇部が配付された。さらに校友会、教育後援会、第一高校・第一中学校のPTAがそれぞれ二〇〇〇部、七五〇〇部、二〇八六部を購入して会員に配付した。

広報と頒布

学外への配付作業と並行して、学生・教職員向けの広報紙「関西大学通信」と校友会の機関紙「関大」に記事を書いて『一五年のあゆみ』の完成を周知した。「関西



完成した『関西大学115年のあゆみ』

大学通信」の場合は二九四号（平成十三年十一月二十八日付）の見開き二ページを使いグラフとして特集した。校友会の機関紙「関大」では五〇六号（平成十三年十一月十五日付）と五〇八号（平成十四年三月十五日付）の二回にわたって記事を掲載した。こちらの方には、でき

るだけたくさんの方に読んでもらいたいという趣旨で、希望者に一冊千円（本体価格）で頒布することも記載した。その

ため、卒業生を中心とする学外者から相当数の購入希望が寄せられた。そして、その後も引き続き校友会と連携しながら積極的な頒布活動を行った結果、平成十四年十二月末現在で一般への販売部数は約一五八一部となっている。

使用資料（写真）の整理と保存

『一一五年のあゆみ』に収載した写真は全部で六〇一点にのぼった。年史編纂室が所蔵する写真以外に広報課や施設課、国際交流センター、エクステンション・リードセンター、校友会、教育後援会など、学内関係機関からも数多くの写真を借用した。

年史資料の場合、本ができたからといって、使用した写真をもとあった場所や借用した部署に返せば作業完了、というわけにはいかない。印刷所から返却された写真の整理も大切な業務の一つである。

将来の貸出や利用等を視野に入れながら、整理作業は次のような手順で行った。まず、本編に使用した写真はすべて複写し、そのネガフィルムをもとにフोटオCDを

作成した。そして複写した写真は掲載順に並べてアルバムに収録した。その際、掲載写真番号と掲載ページ、写真キャプションも同時に記入した。さらに、貸出依頼の対応時に利用するため、原板の所在をあらわした一覧表を作成した。以上のような作業を行った結果、プリント、フォトCDによるデジタルデータ、いずれの面からでも写真の提供に対応することができるようになった。また、デジタルデータを作成したことで、今後制作を予定している年史編纂室のホームページの画像写真にも利用しやすくなったという利点が生れた。

今後の年史編纂

配付作業や写真の整理作業などが完了した今、ようやくレイアウトや校正をしていたときは違った視点でページをめくることができるようになった。

しかし、のんびりしてはいられない。関西大学は創立一二〇周年を見すえて平成十四年四月、新たに記念事業局を設置し、記念事業の内容について策定作業をスタートさせた。その過程で『一二〇年史』の刊行も決定した

のである。

『一二〇年史』については、この原稿を校正している平成十五年二月の時点では、まだほとんど具体的なことが決まっておらず、基本的な構成や体裁等を検討するのが差し迫った課題であるが、基本線が決まったとしても、編纂のための資料収集や具体的な執筆・編集活動、スタッフの問題等、越えていかなければならないハードルがいくつも存在している。『二一五年のあゆみ』で得たノウハウをもとに、さらに充実した年史を作っていかなければならない。

三年後はあつという間にやってくる。やはり、のんびりとはしてはいられないのである。

(くま ひろき 年史編纂室課長)